

## 趣旨説明

左近幸村

このワークショップの目的は、グローバル・ヒストリーと近代東北アジア史を結びつける試みである。主催者の一人である秋田茂氏（大阪大学）は、「一国史」を超える試みを行っており、そのために2003年の9月から、優れた外国人研究者を大阪大学に招聘する「グローバル・ヒストリー・セミナー」を10回開催してきた。ここでグローバル・ヒストリーの土台となっていたのは、イギリス帝国研究の蓄積である。秋田氏はイギリス帝国史をグローバル・ヒストリーへの「ブリッジ」と位置づけているのである。しかし今のところ、グローバル・ヒストリーに興味を持っているのは、イギリス帝国史やアメリカ史の研究者だけのように思える。実際、秋田氏によって招聘された研究者のほとんどは、イギリス帝国史やアメリカ史の専門家である。しかし秋田氏自身も認めているように、「ブリッジ」を渡って真のグローバル・ヒストリーに達するためには、「アングロ・サクソン中心主義」を脱する必要がある。

そこで今回のワークショップでは、東北アジアの歴史を議論した。グローバル・ヒストリーの構築を目指す人々は、しばしばアジア史に言及するが、東北アジア（満洲やロシア極東）に言及する例はまれである。彼らのアジアの北限は、北京にあると言ってもよい。しかしグローバル・ヒストリーを構築する際、東北アジアの歴史をその枠組に組み込むことは、不可欠であるように思える。中国、ロシア、日本、アメリカといった国々が、各々の利害を20世紀の東北アジアで衝突させたのである。東北アジアの歴史を研究するには、必然的にトランス・ナショナルな視点が不可欠になる。東北アジアにグローバル・ヒストリーの新しいモデルを見出すことも、可能であると思える。

今回デヴィッド・ウルフ氏（Woodrow Wilson Center, Washington D.C.）を大阪に招聘したのには、そういう背景がある。彼の著書、“*To the Harbin Station : The Liberal Alternative in Russian Manchuria, 1898-1914*”（Stanford University Press, 1999）は、東北アジアやロシア極東に関する英語で書かれた本の中で、最も重要なものの1つである。同書の中でウルフ氏は、東北アジアの歴史をロシア、中国、日本という多角的な視点から分析してみせたのである。

中国現代史研と大阪大学 COE との共催となった研究会の初日は、“From the Harbin Station: Globalization goes West” というタイトルで、大阪大学豊中キャンパス、待兼山会館において開催された。今回ウルフ氏には、“Globalization and the Soybean : Interdisciplinary and Intercultural Perspectives” という題目で、大豆の流通を素材として、満洲からアジア太平洋まで広がるマクロな視点を提出してもらった。また企画者の一人である上田貴子氏（近畿大学）にも一緒に、“Chinese networks in Northeast Asia : Its growth, decline and revival” という題目で報告してもらった。この2本の報告は、いずれも東北アジアにおけるモノと人の動きを分析したものであり、グローバル・ヒストリーへの新しいモデルを見出すのに、示唆を与えてくれるものといえる。

なお2日目は、“To the Harbin Station: Globalization comes East” というタイトルの下、大阪大学中之島センターで開催された。こちらは帝政期のロシア極東における東洋学の発達や、日露戦争をトピックとして取り上げ、よりミクロな視点が示された。

この2日間のワークショップを通じて、参加者がグローバル・ヒストリー構築への新たな視点を得ることができたならば、今回のワークショップの目的はひとまず達成されたといえる。

（さこん ゆきむら・北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）